学校通信 Tomorrow 第８号 2026, 2, 2

３学期がスタートして、もう１か月が過ぎようとしています。高校では、大学などの進学に向けて、高３生がラストスパートをかけています。自分の進路実現につながるように頑張ってほしい所です。中学生には、まだまだ先のような話だけど、少しずつ考えていこう！
今月は、学年末テストもあります！２年生は修学旅行だな・・・、いいな。

第 15 回しんぶん感想文コンクール（琉球新報社主催）

県知事賞に堂閑　未莉さん

学校賞　興南中学校　選出

作品朗読 平和考え

浦崎さん しんぶん感想文表彰

第15回しんぶん感想文コンクール（主催・琉球新報社、共催・琉球新報販売店事業協同組合、協賛・東洋水産、前田鶏卵、ぬちまーす、フコク生命 沖縄支社、協力・オキコ、沖縄森永乳業、後援・県など）の表彰式が18日、那覇市泉崎の琉球新報ホールであった＝写真。

最高賞の県知事賞をはじめ各賞に選ばれた60人と学校賞3校の栄誉をたたえた。県内の小中高校から724点の応募があった。

県知事賞には本部小2年の浦崎獅帆（しほ）さん、上本部学園小4年の谷口千畝（せんほ）さん、豊崎小5年の新川恵介さん、興南中2年の堂閑未莉さん、那覇西高校3年の前山和輝さんが選ばれた。

表彰式ではそれぞれ作品を朗読した。

沖縄戦の絵本「つるちゃん」のモデルとなった金城ツル子さんの記事を読んだ浦崎さんは、「これからもたくさんのことを知って平和について考えていきたい」と語った。（中村優希）

☆県知事賞受賞作品の全文を掲載します。　　**平和への一歩　堂閑　未莉（2 年3組）**

「家族を戦争で失ったとき、人はその深い悲しみをどう受け止め、どう伝えることができるのだろうか。」私は琉球新報の6月8日の記事を読んで、そんな問いを強く胸に抱いた。記事では、沖縄戦で父と母を失った島袋安子さん（九十一歳）が、自らの体験をもとに「戦争華」という琉歌を詠み、亡き家族への思いを歌に込めたことが紹介されていた。記事によると、その琉歌には父と杯を交わした兄の記憶、家族を失った母の悲しい姿、そして戦争の別れが詠み込まれているという。民謡歌手の仲宗根創さんが作曲を担当し、完成した歌は糸満市摩文仁にある「平和の礎」の前で披露された。石に刻まれた父や兄の名前に向かって歌が捧げられた光景を想像すると、その瞬間の重さと深さに胸が締めつけられるように感じた。私はこの記事を読んでまず「悲しみを歌にする力」に驚いた。戦争で家族を失う苦しみは、想像もできないほど大きいはずだ。私ならその重さに押しつぶされ、言葉を失ってしまうだろう。しかし島袋さんはその痛みを心を秘めるだけでなく、琉歌という形で表現している。誰にでもできる行為ではないと思う。だからこそ記事を通して島袋さんの強さに心を打たれた。さらに考えてみると歌や芸術には言葉を超えて思いを伝える力があると思った。戦争体験を文章で読むだけでは想像しづらいことも、歌になれば心に響きやすい。特に琉歌は沖縄の伝統的な表現方法あり、文化そのものが記憶を運ぶ役割を果たしている。島袋さんの琉歌は、単なる個人の悲しみを超えて、地域の文化や歴史と結びつき後世へ受け継がれる形になったのだ。そこに芸術のもつ大きな力を感じた。もし自分が同じ立場にたったらどうだろうか。大切な人を失ったとき、私は悲しみを抱え込んでしまい、外に出すこともできないのではないかと思う。せいぜい日記に書くぐらいで、歌にする勇気もないだろう。だからこそ、島袋さんが悲しみを「歌」に昇華した事は自分には到底まねできない強さだと感じた。そしてその強さがあったからこそ、私のように戦争を知らない世代にも深く伝わったのだと思う。また、この記事を読んで、「戦争の記事をどう伝えるか」ということも考えさせられた。戦争体験を直接語れる人は少なくなっている。けれど歌や芸術の形であれば、世代を超えて残すことができる。私たちの世代は戦争を体験していないが、歌を通して悲しみを感じとり、そこから平和の大切さを学ぶことができる。だから「亡き家族への琉歌」は、ただ一人の体験を超えて、私たちに訴えかけてくるものだと思った。この記事を読みながら、今の自分の日常も振り返った。友達と笑って過ごす時間や家族と食卓を囲む時間はあまりにも当たり前のものに見える。しかし、それらは決して当たり前でなく多くの犠牲の上にあるのだと気づかされた。戦争で大切な人を奪われた人々がいるからこそ、今の私たちが平和を享受できている。その事実を忘れてはいけないと強く思った。「家族を失った悲しみを歌にする」という行為から私は多くのことを学んだ。悲しみを無かったことにするのではなく、正面から受け止め、伝える形になること。その姿勢は戦争の記憶を未来へつなぐ力になっている。そしてそれは、私たちが平和を考えるきっかけにもなる。私はこれからも日常の平和を当たり前だと思わず一つひとつの時間を大切にして、島袋さんのように思いを形にして伝えることの意味を忘れずに生きていきたい。

今回このような賞をいただき、大変うれしく思っています。記事に登場した方が、亡き家族への思いを琉歌に込めたことに強く心を打たれ、戦争の悲しみは過去のものではなく、今にもつながっているのだと感じました。感想文を書く中で、戦争を体験していない世代として、自分は何を感じ、どう受け止めるべきなのかを考えながら、自分の言葉で表現することを大切にしました。その文章が評価されたことを光栄に思っています。
この経験を通して、平和について考え続けることの大切さを改めて感じました。　**堂閑　未莉**